

## 博多方言名詞アクセントの年代差

早田, 輝洋

<https://doi.org/10.15017/2332646>

---

出版情報 : 文學研究. 81, pp.37-47, 1984-02-25. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 博多方言名詞アクセントの年代差

早 田 輝 洋  
陣 内 正 敬

## 0. はじめに

この小論は博多方言の名詞アクセントに見られる年代差の様相を明らかにし、その要因を考察しようとするものである。

ここでいう博多方言とは厳密な意味のものではない。ここでデータとして扱う7人のインフォーマントのうち老年層の3人についてはいわゆる旧博多部（旧博多部とは、伝統的には、西を那珂川、東を御笠川、南を旧鹿児島本線によって区切られた商業地域であって、那珂川以西の城下町福岡と相對する）の生え抜きであるが、他の4人についてはそれ以外の市内出身者である。従って地域差という問題が絡んで来るが、ここでは立ち入らない。<sup>1)</sup> なお7人のインフォーマントについては後にそれぞれ簡単に紹介する。

この方言の名詞のアクセント体系については、これまで平山（1951）、金田一（1967）などの分析があるが、いずれも平板型を持たない体系と解釈する点で一致している。しかし早田の分析（1982）によれば、この方言のアクセント体系は平板型を持ち尾高型のない体系であるとされる。この小論では早田の解釈によるアクセント体系を用いている。

論文執筆までの経過について述べると、インフォーマントA、B、C、E、FおよびHのデータ蒐集と最初の大まかな構想、若干の指示は早田によるが、早田が1983年8月以降北京へ出張したため、それ以後のインフォーマントD、Tのデータ蒐集およびその後の分析、説明、解釈、論文の執筆は原則としてすべて陣内による。

インフォーマントは次のとおり。年齢は調査当時のもの。

- A：安川ハル氏 明治29年（1896年）生まれ 博多区呉服町在住 86歳。  
B：斧田フジ氏 明治43年（1910年）生まれ 博多区中呉服町在住 72歳。  
C：安川允子氏 大正15年（1926年）生まれ 博多区御供所町在住 56歳°  
D：平野尊識氏 昭和22年（1947年）生まれ 西区高取に33歳まで在住  
35歳。  
E：河島一久氏 昭和34年（1950年）生まれ 東区箱崎に23歳まで在住  
23歳。  
F：久保智之氏 昭和32年（1957年）生まれ 城南区に在住 26歳。

なお参考として次の二つを用いる。

- H：『九州方言音調の研究』平山輝男（1951）より捨ったもの。この調査のインフォーマントは湊町，大名町（いずれも旧福岡部）出身。なお分析の対象となった語彙が他のインフォーマントの半分程であり，この小論では参考程度に留めておく。
- T：東京方言 『明解日本語アクセント辞典第2版』 秋永一枝編 1981年三省堂から捨ったもの。

## 1. 資料

調査語彙は原則として平山輝男（1951）の名詞語彙，金田一春彦（1974：62—73）の類別語彙表中の名詞語彙，上野善道（1976）の名詞語彙のすべて，および調査の進行中に恣意的に入ったかなりの語彙などからなる1500余語。データが大量であるため計算機を使って処理することにした。その際アクセント型を次のように数値化して入力した。

※ ○は拍を，∪はアクセントの位置を示す

0 :	アクセントがない型	(○○ ○○○ …)
1 :	“ が語末にある型	(○○ <sup>¯</sup> ○○○ <sup>¯</sup> …)
2 :	“ が語末から2拍目にある型	( <sup>¯</sup> ○○ ○○○ <sup>¯</sup> …)
3 :	“ が語末から3拍目にある型	( <sup>¯</sup> ○○○…)
⋮	⋮	⋮

（なお1はA, B, C, H, Dにはなく, E, F, Tにのみみられる型）

以下集計結果に出てくる0, 1, 2, …の数値は上のことを意味している。  
なおデータの集計, 分析には統計パッケージSASを利用した。

## 2. 集計結果, 分析

2. 1 各々のインフォーマント相互の類似度を見るために, アクセントの位置の一致率, あるいは, 相違の状況を表Iに示す。

この表からいえることは, まず一致率からみて大きく三つのグループに分けられる。A, B, C, H/D/E, F, (T)となり, 年代差をよく反映している。次に表のます目の右上および左下の数値を比較すると, A~H, E~F (T)のそれぞれのグループ内ではほとんど同じ割合であるのに対し, グループ間の比較となると(例えばAとE, BとFなど)いずれもほぼ2倍近い割合で左下の数値が大きい。またDはどちらのグループに対しても同じような相違を示している。このことは, 老年層(A~H, 以下「老」と略)から, 若年層(E, F, 以下「若」と略)へかけて, アクセントの位置が後ろへずれる割合がずっと多いことを示している。全般的な類似度あるいは相違の様相はこのようなものであるが, この状況をもう少し別の観点から詳しく調べてみる。

2. 2 金田一の類別表(1974:62-67)<sup>2)</sup>に従ってそれぞれの類に属する名詞の数がA~Tでどのように対応するか, 拍数ごとに調べたのが表IIである。

表 I. アクセントの位置の一致度・相違度 (百分率)

	A	B	C	H	D	E	F	T
B	2.7 95.2 2.2							
C	3.4 92.3 4.2	2.1 94.4 3.3						
H	2.9 93.2 3.9	2.4 93.4 4.2	2.7 93.1 4.0					
D	10.8 77.2 12.0	10.2 77.6 12.2	10.4 78.6 9.2	7.3 84.3 8.5				
E	10.8 65.8 22.0	12.1 66.7 22.2	12.2 66.4 21.4	8.8 72.3 19.0	15.2 68.8 16.0			
F	13.7 65.3 21.1	13.3 65.4 21.3	13.2 66.4 20.3	8.9 72.1 18.9	18.9 66.1 15.1	6.4 90.1 3.5		
T	12.7 66.7 20.7	12.7 66.2 21.2	12.7 66.7 20.5	8.0 73.7 18.3	19.4 63.8 16.7	7.2 89.2 3.5	5.8 89.1 5.2	

AよりBの方が前にある率  
 A  
 B  
 95.2  
 一致率  
 BよりAの方が前にある率

金田一の類別表に挙げてない語彙は《その他》の類とした。表 II(a)は二拍名詞、表 II(b)は三拍名詞、表 II(c)は四拍以上の名詞についてで、数値は全て実数である。合計が各インフォーマントごとに異なるのは無回答だったり、アクセントにゆれのあったものを除いたためである。なお一拍名詞については該当語彙も少なく違いもほとんどみられないので省略する。

二拍名詞については《X類》、4、5類でほとんど変化なし。1類、2類、3類では「老」の頭高型が「若」で平板型あるいは尾高型で対応している。《その他》の類では「老」の平板型が「若」で平板型と尾高型に分かれたような対

表II(a) アクセントの位置の単純集計 — 2拍名詞 —

	X 類			1 類			2 類			3 類			4 類			5 類			その他		
	0	1	2	0	1	2	0	1	2	0	1	2	0	1	2	0	1	2	0	1	2
A	7	5		64	31		26	14		79	9		4	48		1	32		66	50	
B	8	4		64	32		24	17		78	11		6	47		1	32		63	52	
C	6	5		63	34		26	14		77	11		6	47		1	32		64	52	
H	2	0		47	7		20	6		45	6		0	26		1	21		22	17	
D	2	9		69	29		23	11		60	14		6	47		0	34		47	65	
E	3	2	6	89	3	5	8	25	6	11	57	11	6	2	44	2	1	30	33	24	48
F	2	3	5	78	7	9	7	25	7	5	70	12	4	3	43	2	2	28	27	28	48
T	6	0	6	94	1	3	3	31	7	2	79	7	2	3	49	1	1	32	30	26	54

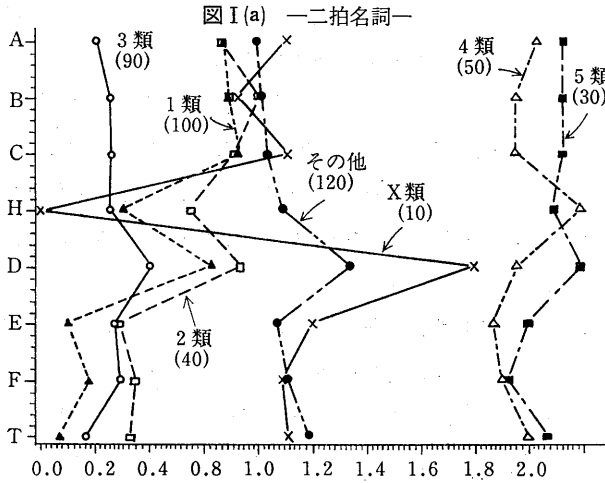
表II(b) アクセントの位置の単純集計 — 3拍名詞 —

	X 類				小豆類				形類				兎類				頭類				命類				兜類				その他			
	0	1	2	3	0	1	2	3	0	1	2	3	0	1	2	3	0	1	2	3	0	1	2	3	0	1	2	3	0	1	2	3
A	7	10	3		11	2	13		19	22	18		0	4	3		46	3	2		3	13	7		2	6	6		94	47	54	
B	7	9	4		10	3	12		19	25	16		1	4	2		45	3	4		3	13	7		3	3	7		99	43	49	
C	7	9	4		12	2	11		20	24	16		1	4	3		45	4	3		4	12	7		3	5	6		99	46	51	
H	4	2	3		8	2	6		11	12	8		0	2	1		24	1	2		3	8	5		1	4	3		40	13	20	
D	5	7	6		11	8	4		35	29	5		1	6	1		39	7	2		3	4	11		2	6	5		79	47	45	
E	8	3	2	6	21	0	0	3	60	4	1	1	3	4	1	0	22	23	7	2	4	2	3	13	6	0	3	4	87	15	28	47
F	7	4	2	7	20	2	0	3	57	4	0	2	3	4	1	0	15	29	4	3	4	3	2	12	5	1	3	4	78	23	23	52
T	8	1	2	6	22	0	0	2	68	0	0	0	1	4	1	0	7	38	6	1	3	1	3	14	5	0	3	4	70	25	28	47

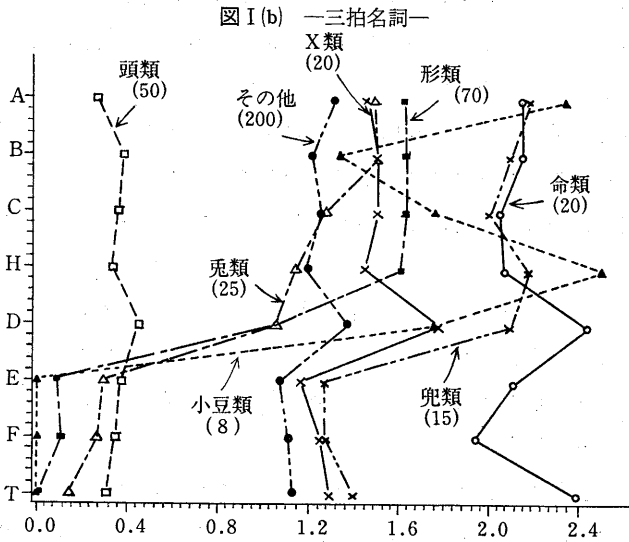
表II(c) アクセントの位置の単純集計 — 4拍以上の名詞 —

	0	1	2	3	4	5	6
A	189		110	129	87	6	7
B	187		109	135	90	6	7
C	193		103	139	79	8	5
H	71		10	40	25	0	0
D	192		59	161	66	2	2
E	195	9	62	125	77	3	0
F	181	13	60	126	86	3	0
T	147	8	41	113	62	4	0

博多方言名詞アクセントの年代差 (早田・陣内)



(語末から数えた) アクセントの位置の平均拍数



(語末から数えた) アクセントの位置の平均拍数

※ A~Dとの比較のためE, F, Tの1→0に変換してある。

※ ( ) 内の数値は大体の該当語数。

応をみせている。三拍名詞でも、《兎類》と《形類》では「老」の頭高型ないし中高型が「若」ではほとんど平板型で対応し（《小豆類》もその傾向にあるが語数が少ない）、《頭類》では「老」の平板型が「若」の中高型と尾高型に対応しているようみえる。《X類》、《命類》、《兜類》でも細かな変異がみられる。四拍以上の名詞の場合は複合語その他の様々な性質の語彙が含まれるが、概してA～T相互の相違は少ない。二拍名詞、三拍名詞とは違った観点から考察する必要がある。

この表Ⅱ(a), (b), (c)を通して非常に目につくことは「老」と「若」の相違であり、またこの「若」にみられる分布がTとかなり類似しているということである。このことが一目でわかるように上の表をグラフにしておく。表Ⅱ(a)は図Ⅰ(a)と、表Ⅱ(b)は図Ⅰ(b)と対応している。グラフの横軸は「語末から数えたアクセントの位置の平均拍数、であり、各類（金田一の類別）に出てくる0, 1, 2, …の類別ごとの加重平均である。これによって各インフォーマントが、類別ごとみても、平均してどこら辺にアクセントを持っているかがわかる。縦軸は各インフォーマントを表す。

以上の表Ⅱ、図Ⅰによって全体としての対応関係あるいは変化の傾向はつかめるが、あくまでもこれは全体としての分布であって個々の語いのアクセント型が世代間でどのように対応しているのかについては不明なままである。

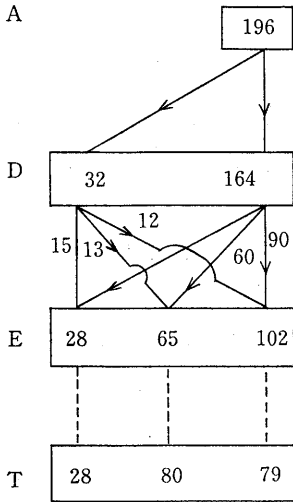
2. 3 そこでA～Fの中から各世代（2. 1で明らかになった各グループ）より代表者をそれぞれ一人選び、参考にTも加えて相互に比較する。「老」（A～H）からは最も年輩のA、中年層からはD、「若」（E, F）からはEを取ることにする。<sup>3)</sup>

A, D, E三者について、あるアクセント型を持つ語彙がどのように変化しているかを跡づけたのが図Ⅱである。図Ⅱ(a)－0がAでの0（平板型 ○○）が、図Ⅱ(a)－2はAでの2（頭高型  $\overline{\text{○○}}$ ）がそれぞれどのように変化しているかを示している。図Ⅱ(b)は三拍名詞についてで、その下位区分は図Ⅱ(b)－0



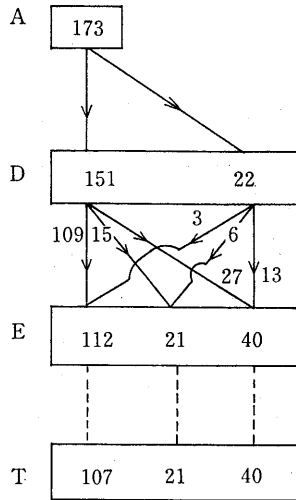
図Ⅱ (a)-0

2 1 0



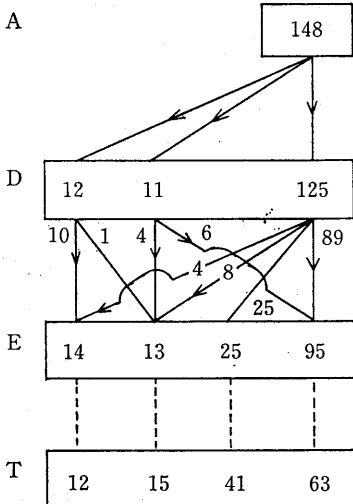
図Ⅱ (a)-2

2 1 0



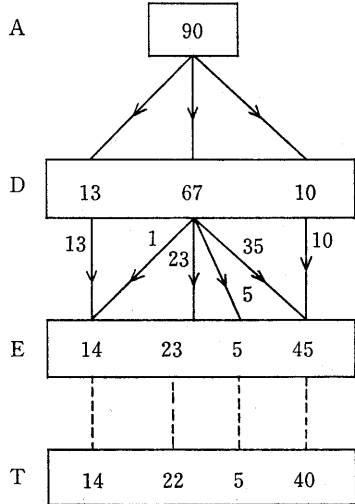
図Ⅱ (b)-0

3 2 1 0



図Ⅱ (b)-2

3 2 1 0



がAでの0（平板型 ○○○）が、図Ⅱ(b)－2はAでの2（中高型 ○○○）が、図Ⅱ(b)－3はAでの3（頭高型 ○○○）がそれぞれどのように変化したかを表す。

2. 4 これまでの集計結果から「若」のアクセント体系はT（東京方言）のそれに非常に近くなっていることは明らかであり、これはアクセントレベルでの共通語化とみなされる。明らかな共通語化の例として、まず「若」にみられる尾高型の出現が挙げられる。従来区別のなかった語末に新たな区別が生じたというのは、一般的に外的な力が働いた可能性が強いし、しかもTの分布に近似しているということから間違いないであろう。これはいはば質的变化であり、「老」と「若」の名詞アクセントの体系が基本的に変ったといえる。次に頭高型への変化であるが、アクセントの位置が前の方へずれるというのは音声学的にみて「労力削減の法則」（金田一1975：74）に逆行した現象であり、一般に何らかの外的要因が考えられる。しかもDの世代からすでにほぼTの分布と一致している。これは頭高型が非常に目立ちやすく、共通語化する際にも最も容易に、早く同化されることが考えられる（国立国語研究所1974：78，馬瀬1981：4，杉藤1983：25）。<sup>4</sup>

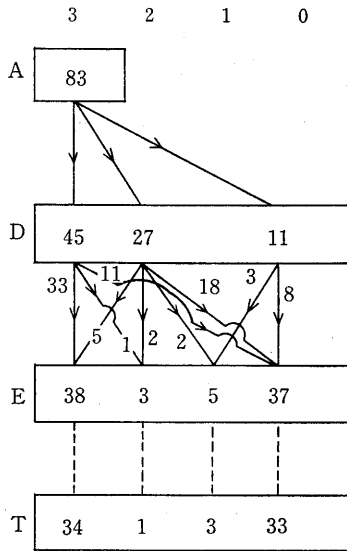
これに対してアクセントの位置が後退する変化についてはどうであろうか。全般的にみてこれも共通語化の様相を呈しているが、それだけでは説明できず方言独自の变化も考え併さねばならない事実がある。

図Ⅱ(b)－3によると、Aで頭高型であったもののうち、Dでは27/83=32.5%が中高型に移っており、しかもこの型はTではほとんどみられない。さらにこのうちの18/27=66.7%がEで平板型へ、2/27=7.4%が尾高型へ移っている。この現象はTのアクセント型への切り替え（同化）という「不連続的」なものではなく、アクセントの位置が後へずれていくという「連続的」な推移を表している。

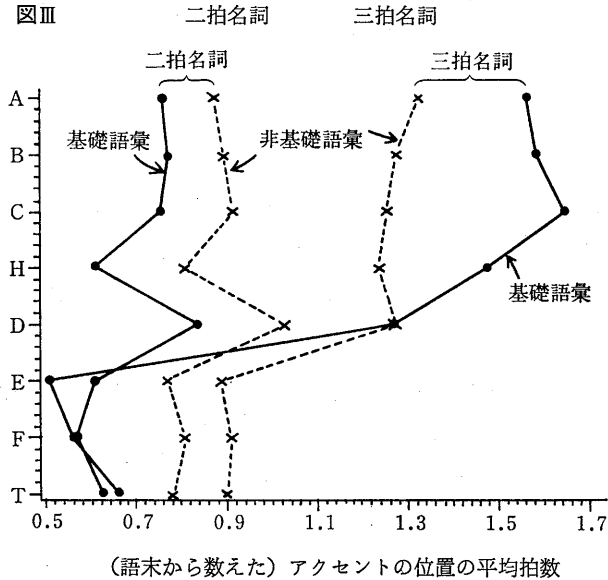
もうひとつは基礎語彙にみられることからである。全調査語彙を服部の基礎

博多方言名詞アクセントの年代差 (早田・陣内)

図II (b)-3



図III



語彙調査表（1957）によって、基礎語彙と非基礎語彙の二つに分け、図Ⅰと同様な方法でグラフ化したのが図Ⅲである。

一般に基礎語彙は外的な力に対する抵抗力が強く変化しにくいと言われている。一方図Ⅲによれば、3拍名詞ではその基礎語彙の方にアクセントの後退現象（年代差）が顕著に認められる。従ってこれは方言内での変化という可能性が強い。

### 3. おわりに

従来からアクセントは最も変化しにくいレベルと考えられているが、博多方言ではかなりの年代差が観察され、共通語化が急速に進んでいることがわかった。しかし単なる共通語化だけでは説明しきれない事実もあり、方言に内在している“drift”（労力削減がその主なものであろう）の力も考慮する必要がある。

はじめに断ったように、博多方言の年代差といたしながら地域的に異ったインフォーマントを使ったり、また年代差を変化とみなしたりいずれも話を単純化しすぎたきらいがあるが、大まかな実態は十分に把握できたといえる。

最後に、資料を提供していただいた方々、またその整理に参加してくれた諸氏に心からお礼を申し上げる。

追）この小論、分析対象となったアクセントの資料（インフォーマントDとTは除く）は近々刊行の予定である『博多方言のアクセント・形態論』早田輝洋著 九大出版会 の巻末に付されているものである。

#### 〔注〕

- 1) 早田（近刊）によればアクセントに関して、「博多地区と福岡地区との違いも当然調査されるべきであるが、平山氏の報告から推察するに、余り本質的な違いはないように思われる。」(p. 3) とある。
- 2) 金田一の類別表によれば、名詞は拍数ごとにいくつかの類に分かれ、一拍名詞では、第1類（蚊、血など ○）、第2類（葉、名など ○）、第3類（木、田など ○）、二拍名詞では、第1類（姉、蟻など ○○）、第2類（石、音など ○○）、第3類（足、犬など ○○）、第4類（糸、海など ○○）、第5類（秋、雨など ○○）、

三拍名詞では、《形類》（形、魚など ○○○）、《兎類》（兎、雀など ○○○）、《小豆類》（小豆、娘など ○○○）、《頭類》（頭、明日など ○○○）、《命類》（命、涙など ○○○）、《兜類》（兜、薬など ○○○）、このほかどの類に入れてよいか決められないものがそれぞれの拍数にあるとして、毛、背、上、先、間、欠伸などの例が挙げられている。この小論ではこれらを《X類》と呼んでおく。

なお○は拍、－はアクセントの位置を表し、各語のあとに出したアクセント型は全て現代東京方言のそれである。

- 3) 「老」(A～H)間、あるいは「若」(E, F)間にみられる細かな違いについては今回は考察できなかったが、本質的な差異はない。EとFの違いは表Ⅱからもわかる通り、平板型と尾高型の割合に関するものが主で、ほとんど一貫してFの方に尾高型の割合が多い。またEの方に語末アクセントの区別のはっきりしないものが若干ある。
- 4) 東京でしばらく生活した経験を持つある福岡市出身の人によれば、地方から上京して来た人の中には必要以上に頭高型で発音する者があったということである。これは過剰訂正 (hypercorrection) の一種と思われるが、頭高型が最も目立ちやすいことのひとつの証拠となろう（国立国語研究所 1974：96にも同類のことが述べてある）。

〔引用文献〕

- 上野善道 1976 「奈良田のアクセント素の所属語彙」『文経論叢』弘前大学人文学部 11巻3号
- 金田一春彦 1967 『日本語音韻の研究』東京堂出版  
1974 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房  
1975 『日本の方言』教育出版
- 国立国語研究所 1974 『鶴岡における20年前との比較』国立国語研究所報告52
- 杉藤美代子 1983 「アクセントの「ゆれ」」『日本語学』2巻8月号 15—26 明治書院
- 服部四郎 1957 『第三次基礎語彙調査表』東京大学言語学研究室
- 早田輝洋 1982 「博多方言の名詞のアクセント体系」『九大言語学研究室報告』3 3—20  
近刊 『博多方言のアクセント・形態論』九大出版会
- 平山輝男 1951 『九州方言音調の研究』学界の指針社
- 馬瀬良雄 1981 「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125 1—19